

スクランブル

東西文化の交差点 ・ まいばら

—文化は米原を通った！—

米原市教育委員会
2012.3



東西文化の交差点

わたしたちが
案内するよ!!



—文化は米原を通った!—

～目次～

東西文化の結節点・米原……………	1
琵琶湖岸の文化交流……………	3
コラム1:「米原」地名の由来	
天野川流域の文化交流……………	5
コラム2: 林立する白鳳寺院	
山麓の文化交流……………	7
コラム3: 伊吹山と霊仙山	
姉川上流の文化交流……………	9
コラム4: 曲谷の石臼作りと流通	
縄文時代の様相……………	1 1
弥生時代の様相……………	1 4
古墳時代の様相……………	1 5
古代物流ターミナル「六反田遺跡」…	1 7
中世の焼き物流通……………	1 8
さいごに —「米原らしさ」を遺跡から探ろう—	

東西文化の結節点・米原

交通都市として知られる米原市は、古くから東山道(江戸時代の中山道)と北陸道の分岐点として発達してきました。江戸時代、市域南部を東西に通過する中山道には番場宿、醒井宿、柏原宿の3ヶ所の宿場町が、さらに北国街道には米原宿、北国脇往還に春照宿と藤川宿が置かれました。現在でもこれらの道は踏襲されています。国道8号は新潟市から日本海沿いに北陸地方を縦断して滋賀・京都に至る幹線国道で、古代の北陸道を継承します。国道21号は岐阜県瑞浪市から米原市へ至り、ほぼ全区間が旧中山道を踏襲して岐阜県美濃地方を横断する重要な幹線道路です。国道365号は、福井県越前市と三重県四日市市を結び、関ヶ原町～米原市～長浜市にかけての区間は黎明期の東海道本線(長浜線)そのものであり、長浜市の一部区間(旧木之本町—旧余呉町)は旧北陸本線(柳ヶ瀬線)のルートであるなど鉄道との関係が深い道です。さらに、滋賀県の南北をつなぐさざなみ街道が湖岸を走り、これらの道に並行する名神高速道路と北陸自動車道を米原JCTが結んでいます。鉄道網には東海道本線、北陸本線、東海道新幹線、近江鉄道があり、滋賀県の玄関口米原駅をはじめ5つの駅が設置されています。まさに米原は「東西文化の交差点」です。では、それがいつから始まったのか、各時代の様相はどうかを紹介합니다。



姉川上流

岐阜県

長浜市

山麓地域

琵琶湖岸

天野川流域

彦根市

は3~10ページの写真範囲



琵琶湖岸の文化交流 一内湖と湖の道一

東海道線が開業するまで、近江を南下する東山道(中山道)以上に利用され、繁栄したのが琵琶湖。かつてJR米原駅の西側には、戦中の食糧増産を目的に、昭和19年に着工され24年に完成した千拓広っていました。入江内湖遺跡(磯ほか)からは、国内最古級の縄文時代前期前半の5号丸木舟を湖を望む磯山城遺跡(磯)からは、県内最古の縄文時代早期の2体の人骨や、縄文時代全時期を通じまつくだ摩佃遺跡(筑摩)からは、北陸の土器とともに「河童型土偶(表紙写真)」が出土しており、この土偶りました。古代、天野川の河口には琵琶湖有数の湊であり、多くの文献に登場する朝妻湊がありま資は、箕浦あたりから天野川に沿って朝妻街道をくだり、朝妻湊から大津や都へ向け湖上を渡りまの長大な浜堤上には、朝廷などへ食物を供給した宮内省大膳職の筑摩御厨が置かれました。大陸かた。さらに近世には、朝妻湊に代わり彦根藩によって米原湊が開港します。畿内と東国・日本海と



エレベーター実験棟から湖岸を望む

コラム1 —「米原」地名の由来—

入江内湖は時代によっては現在の東海道本線をこえて広がっていたようです。内湖の東と南側には山が迫り、一帯は葦の湿原でした。東山道を行く旅人が葦原に迷った「迷い原」が地名の由来だともいわれています。中世、この地に米原氏という地侍がいましたが、これは「よねはら」氏であることが仮名書きの文書から知られています。

湖上交通でした。

まで、琵琶湖第二の内湖「入江内湖(筑摩江)」がはじめ、5艘の丸木舟がみついています。内に各地の土器や石材が豊富に出土しました。筑を信仰する人々が米原に移り住んだことがわかった。東山道を近江に入った東国からの人や物した。湊に隣接する琵琶湖と入江内湖のあいだからは日本海を経て物資や文化が米原に届きました。湖の結節点が米原です。



干拓前の入江内湖(米原駅付近から)

天野川流域の文化交流 —東山道と北陸道—

古代・中世の東山道復元ルートは、地形図からみると鳥居本(彦根市)から米原(JR米原駅付近)を目指すのが合理的です。しかし、「迷が原」の由来のとおり入江内湖が山裾に接していたとすると、その通行は困難です。米原地区の道筋については、鳥居本から磨針峠を越えて番場にいたる近世の中山道をそのまま古代にさかのぼるとする説が有力です。ただし、入江内湖遺跡は縄文時代から平安時代後期までの集落遺跡で、変動はあるもののその形成が12世紀末頃と考えられることから、東海道線に近似したルートを設定することも可能です。東山道は番場の北方、箕浦あたりで中世の北国街道に分岐します。この道は北上して戦国大名浅井氏の小谷城下に至ることから「小谷道」ともよばれます。さらに箕浦からは天野川北岸を朝妻湊に通じる朝妻街道が分かれます。箕浦は中世に市場が開かれるなど天野川流域の中心的な集落として発展します。時代はさかのぼりますが、このあたりは古代豪族息長氏の拠点で、平野部や丘陵上に3世紀前半から6世紀前半までのさまざまな墳形の息長古墳群が形成され、これに伴う法勝寺遺跡(高溝)、顔戸遺跡・黒田遺跡(箕浦ほか)などの拠点集落が営まれました。ここで東山道は東に折れ醒井にいたります。醒井から梓河内にかけては、古代律令国家が三十里(約16km)ごとにもうけた駅家のひとつ「横川駅」の推定地です。



法勝寺遺跡



コラム2 — — 林立する白鳳寺院 —

醒井では白鳳時代(7世紀後半)の三大寺廃寺の基壇きだんがみついています。仏教が律令国家の思想的支柱として組み込まれると、息長氏はいち早く仏教を取り入れ、天野川流域には法勝寺廃寺(高溝)・正恩寺廃寺(飯)・磯廃寺(磯)・法泉寺遺跡(本郷)などの白鳳寺院が建立されました。荘厳な瓦葺寺院は、古墳に代わる新たな息長氏のシンボルでした。



三大寺廃寺軒丸瓦

山麓の文化交流 —東海から北陸へ—

米原市の南東部は、北の伊吹山(1377m)、南の^{りょうぜんざん}霊仙山(1083m)の山麓部で、西は横山丘陵(312m)清滝山(439m)をはじめ琴岡山・油里山・源氏山などの200~400m級の孤立状山塊が点在している。

地理的にみると、美濃国(岐阜県)との国境に接し、古代三関のひとつである不破関(関ヶ原町)があります。このあたりは梓河内や柏原の山地部、鈴鹿山地と伊吹山地との地峡部(関ヶ原地峡)を長くであり、政治上、戦略上、常に重要な位置を占めてきた場所です。

東山道の経路は時代により変遷します。中世には梓河内から^{まるやま}円山の西をまわって清滝に出ます。前を通過していました。江戸時代に中山道が整備されると柏原に宿場が置かれます。一方、柏原はした。伊吹山麓を縫うようにはする北国脇往還は、関ヶ原で東山道と分かれ木之本で北国街道に合小谷城がこの街道を城下に取り込み、沿線には関ヶ原・姉川・賤ヶ岳という歴史上大きな役割を担

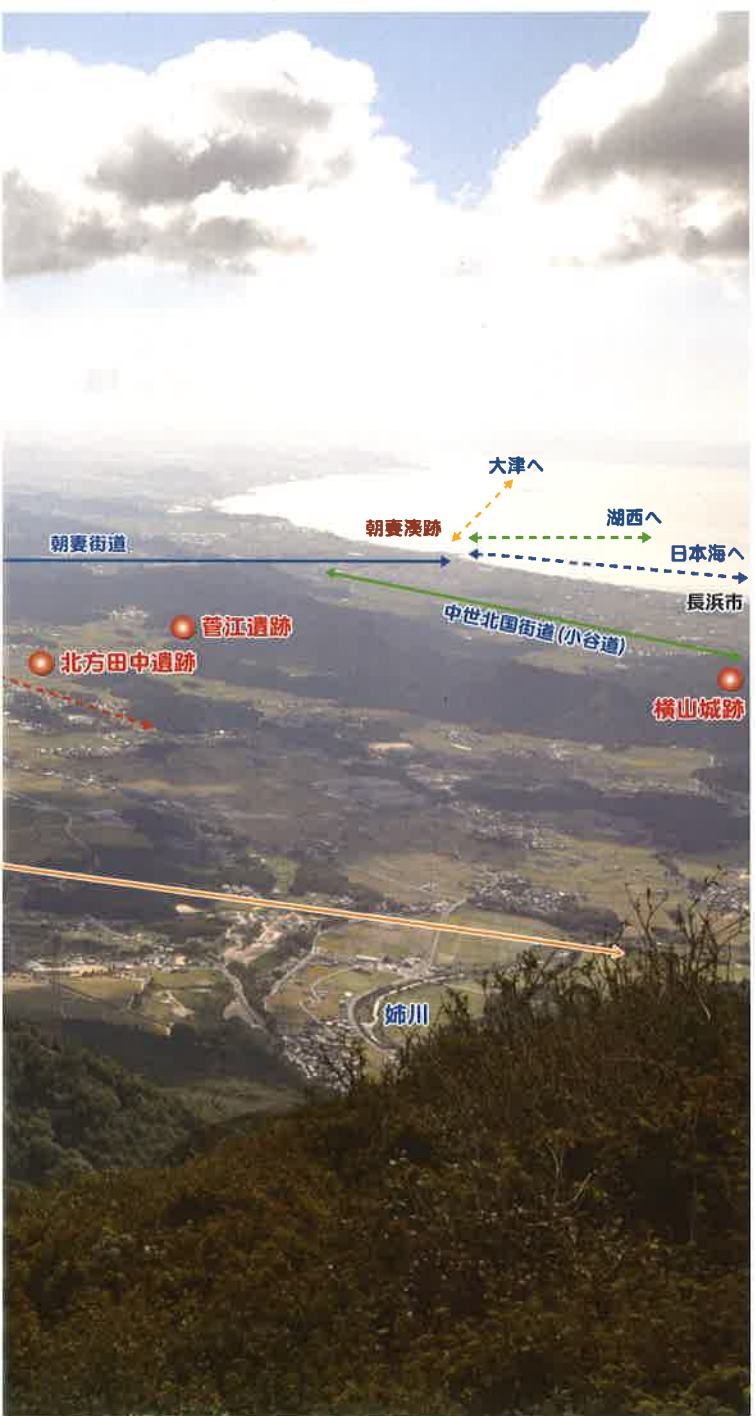


が南北に縦断して琵琶湖岸の地域と分ける盆地状の地勢です。平野部には、
めに、耕作地はこれらを縫うように点在しています。

至近距離にあります。東山道は醒井を越えて近江最後の町場・柏原にいた
寺や今須を経て不破関にいたる、まさに東西文化の接点、文化導入の門戸

ここは、北近江の守護大名京極氏きょうごくしの本拠地で居館や菩提寺があり、その門
日本海地方、とくに越前に至る幹道である北国脇往還ほっこくわきおうかんにも分岐していま
流する東海・北陸を結ぶ最短ルートです。京極氏の上平寺城、浅井氏の
った古戦場があります。

伊吹山頂から山麓を望む



伊吹山

コラム3 ———
—伊吹山と霊仙山—

中世の東海道の旅は、鈴鹿峠や濃尾平野の大河を避けて、草津から近江路を北上し、米原を通って美濃赤坂にいたり、尾張で近世の東海道へとつながるルートが、軍勢・個人を問わず安定した行程でした。伊吹山はいつの時代も旅人の目をひく名山で、荒ぶる神の棲む畏敬の山です。対する霊仙山は奥が深く、池や湧水、洞窟や滝、奇岩巨岩などが山中に点在する修行の山でした。

姉川上流の文化交流 —美濃と結ぶ峠道—

市域の北東部にのびる姉川上流の東草野地域は、北から、姉川の源流に位置し周囲を1000m級の山々に囲まれた標高500mの別天地・甲津原。急峻な山に囲まれ、標高400～500mの美しい溪谷が織りなす曲谷まがたにと甲賀こうか。姉川峡谷の中央部、河岸段丘が連なり起伏のある明るい小盆地よしつきが広がる吉槻などの集落が谷筋に沿って並んでいます。車社会の今でこそ、行き止まりの「平家落人伝説の里」ですが、各集落の歴史は古く、起し又遺跡(曲谷)では縄文時代中期末から後期の竪穴住居跡5棟と、関東や飛騨地方、東海の土器や瀬戸内地方の土器など、多彩な東西交流を物語る遺物が出土しているように、峠を越えて尾根道を利用した交流がすでに始まっていたことがわかります。甲津原からは、鳥越・新穂・品又の三つの峠によって西美濃と結ばれていて、古来、人や物資の交流も多く、数々の伝承や伝統に彩られた地域です。なかでも戦国時代には、本願寺顕如ほんがんにょ・教如、秀吉の母や奥方、石田三成などが戦乱に追われてこの地を訪れ、その名残りとして「能面」や「顕教踊けんきょうおどり」などの文化財が伝わっています。

拠点集落の吉槻は、七曲峠を越えて長浜から木之本・敦賀に至るルートと、甲津原から美濃へ通じる北路、南下して板並から国見峠を越えて春日村に通じる南路があり、近江と美濃との交通の要衝であるとともに物資の集散地としての役割を果たしてきました。

曲谷臼石切り場跡





コラム4 —————
 一曲谷の石臼作りと流通—

この地に逃れてきた人物に、木曾義仲の書記官・覚明(西仏房) かくみょう さいぶぼう があります。義仲の敗北(1184年)で曲谷にきた覚明は、加工に適した花崗岩を見つけ、故郷の信州(木曾)から石工を連れてきて石臼づくりを伝えたとわれています。ただし、日本で花崗岩のような硬質石材の加工が伝わったのは東大寺再建(1190年)のときだとされていますので、この伝承には時代的な誤差があります。しかし、鎌倉時代末頃の板碑(白山神社/市文化財)が残されており、このころには石材加工がおこなわれていたようです。戦国時代に始まり、江戸時代中頃から明治の頃まで作られた曲谷の石臼は、北近江一円から西美濃まで峠道を利用して流通しています。

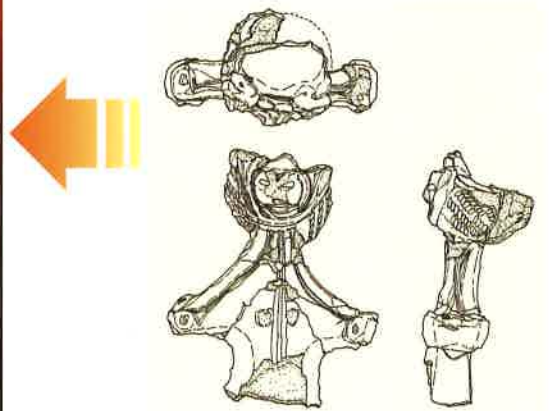


縄文時代は、1万3,000年前から3,000年前の約1万年間に栄えた文化です。米原市は県下でもいちる地形。入江内湖遺跡や磯山城遺跡の縄文人は、丸木舟で内湖から琵琶湖に漕ぎだし、背後の里山は産卵のために岸に押し寄せる湖魚。秋は里山の堅果類を保存食に蓄え、冬は猪や鹿を狩る。米原間部の起し又遺跡(曲谷)からは早期(約6,000年前)の土器が出土しています。中期には霊仙山麓の番みられる埋甕・配石遺構が伴います。この時期は全域で遺跡の数も多く、関東・中部山岳・東海・ヌカイトは奈良県二上山産や香川県金山産や北陸原産のもの、黒曜石は隠岐島久見産や長野県霧ヶ彼こくようせきの地の情報とともに原石が伝わっていて、米原を舞台に東西文化の交流が盛んにおこなわれている。



河童型土偶 (筑摩佃遺跡)

北陸から米原へ



河童型土偶実測図 (富山県長山遺跡)

信仰とともにやってきた土偶

河童型土偶は皿状の頭部と表情が河童に似ていることから名づけられました。北陸と中部山岳地方に集中して出土しています。筑摩佃遺跡の中期の土器群には北陸の土器も目立つことから、この土偶をまつる北陸の人々が移住してきたムラだったのかもしれません。



御物石器 (杉沢遺跡/県立琵琶湖文化館蔵)



御物石器 (岐阜県ソトワ遺跡)

皇室に献上された御物石器

明治11年、天皇の北陸・東海巡幸のとき献上され、皇室御物になったことが学術名称になっている呪術具です。縄文時代晩期前半に岐阜県を中心とした狭い範囲に分布していて、滋賀県では杉沢遺跡でしか見つかっていません。本資料は左下図左側の盛り上がり部を欠いています。

発に行き交う人・物・文化一

早く縄文人たちが住みはじめた地域です。里山が琵琶湖の近くまで迫り、内湖が山と湖を結びつけに入り、ときに天野川をさかのぼって伊吹・霊仙の深山に分け入りしました。春は山菜。夏にかけての縄文時代は、四季折々の食べ物が手に入る楽園です。湖岸の磯山城遺跡や法勝寺遺跡(高溝)、山の面遺跡(梓河内)や山間部の起し又遺跡で竪穴住居跡が発掘され、起し又遺跡では東日本の影響が北陸・瀬戸内などからさまざまな形と文様をもつ土器が出土しています。また、石器の石材は、サ峰産・小笠原諸島神津島のものが使用されていました。遠く200~300キロもはなれた原産地から、たことがうかがえます。



合口甕棺出土状況(平成15年)



合口甕棺出土状況(昭和13年)



昭和13年出土の合口甕棺



合口甕棺分布の中心・杉沢遺跡

晩期後半(約3000年~2800年前)の合口甕棺あわせくちかめかんがこれまでに12基見つかっています。大型の甕形土器2点の口を合わせてお棺にしたもので、愛知県や福井県、滋賀県湖西地方で出土していて、杉沢が分布の中心に当たります。



合口甕棺の分布

列島各地から米原へ 一米原へ集う縄文土器



黒曜石（筑摩佃遺跡）
長野県霧ヶ峰、小笠原諸島神津島産

北陸系の土器（中期／筑摩佃遺跡）
新保式土器など



関東系の土器（中期／起し又遺跡）
加曾利E式系の土器ほか



関西系の土器（後期／起し又遺跡）
中津式土器



伊吹山麓の土器（中期／起し又遺跡）
北白川C式土器



中部山岳系の土器
（中期／礪山城遺跡）
貉沢式土器



関西系の土器（早期／礪山城遺跡）
高山寺式土器



中部山岳系の土器
（晩期／杉沢遺跡）



東海系の土器（中期／起し又遺跡）
神明式土器



東海系の土器（早期／礪山城遺跡）
八ツ崎I式土器

た
く
さ
ん
の
人
が
来
た
よ



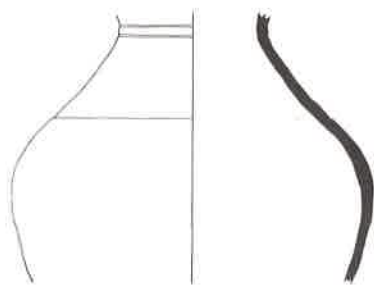
米原でみられる他地域の土器型式

関東系：茅山下層式（早）諸磯a式・勝坂式・加曾利E式（中）など、中部山岳系：貉沢式・曾利式（中）など、東海系：粕畑式・八ツ崎I式・入海式（早）清水ノ上I式（前）北屋敷式・咲畑式・北裏C式・神明式（中）馬見塚式（晩）など、北陸系：新保式・新崎式（中）八日市新保式（晩）など、近畿瀬戸内系：高山寺式・穂谷式（早）北白川下層式・大蔵山式（前）船元式・里木式（中）中津式・縄手式・北白川上層式・宮滝式（後）船橋式・長原式（晩）など

※土器型式の後の（ ）は時期区分を表わす。

弥生時代の様相 —稲作技術の伝播とムラの誕生—

水稲耕作が普及すると、暮らしの定住性が高まり次第に大きなムラが生まれます。縄文時代晩期、扇状地上の杉沢遺跡の土器にはモミの痕跡が残されていますが、実際に安定した水稲耕作が広まったのはやはり弥生時代に入ってからのもので、立花遺跡(上多良)や埋塚遺跡(箕浦)など、琵琶湖や内湖の周辺に位置する低湿地に集落が営まれます。ここでは、西日本の遺跡で多く出土する「遠賀川式土器」と、東海地方の遺跡で多く出土する「条痕文土器」が見られ、各地との交流のなかで稲作技術が伝播されたものと考えられます。弥生時代のムラは居住区・水田区域・墓域などから構成され、墳墓の規模や内容には格差がうまればじめます。



遠賀川式土器実測図(立花遺跡)



近江～伊勢に分布する土器
(大乾古墳群)



東海系条痕文土器(法勝寺遺跡)

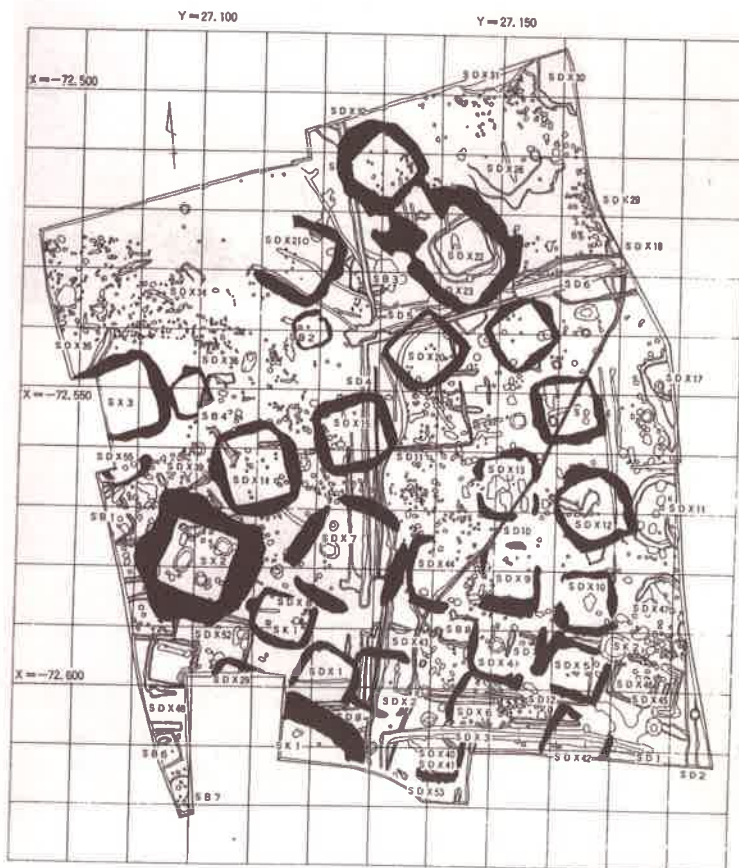
首長墓の展開

墓域ではムラの首長の墓が連立する「首長墓群」が構成され、リーダーは「方形周溝墓」とよばれる溝を巡らせた区画墓に埋葬されます。大乾古墳群(上多良)、法勝寺遺跡などでは中期から後期にかけて首長墓の構築が活発化します。墓に供えられた土器には東海の条痕文土器や近江や伊賀地方に分布する「手焙り型土器」があります。

お米作りが
伝わったよ



手焙り型土器(長門寺遺跡)



連立する法勝寺遺跡の方形周溝墓

大陸から米原へ

米原は日本海との玄関口



内行花文鏡 (石淵山古墳群)

『郡志』では、明治16～17年頃に石淵山古墳1号墳(河南)から出土たとされています。従来は日本で中国や韓国の鏡をまねた仿製鏡ぼうせいきやうとされてきましたが、近年大陸から持ち込まれた船載鏡はくさいきやうと考えられています。

古墳時代の様相 —琵琶湖が結ぶ日本海からの

琵琶湖周辺の低湿地から広がった集落は、古行う大掛かりな導水路が築かれます。墓制をみや「円形の低墳丘墓」(西円寺遺跡)が築かれ、4をはじめとするさまざまな古墳が築かれるように部に器材埴輪きざい はにわが出土した前方後円墳(狐塚5号原古墳(枝折)・すも塚古墳(烏脇)・ミミ塚古墳市内の古墳からは、琵琶湖を通じて大陸との交



金銅製冠破片 (山津照神社古墳)

金メッキを施した帯状の銅板を巻いて輪にした冠で、透かし彫りを施し、針で吊り下げた飾りやガラス玉かまいなりやまをつけます。鴨稻荷山古墳(高島市)や十禅の森古墳(福井県若狭町)出土品と共通する大陸の影響が強い遺物です。

東海から米原へ



バレススタイル土器 (高溝遺跡)



バレススタイル土器 (岐阜市城之内遺跡)
岐阜県文化財保護センター提供



台付壺 (井の田遺跡)



土師器台付壺 (坂祝町東野遺跡)
岐阜県文化財保護センター提供



文化一

竊時代さらに拡大し、3世紀前半には水田の引水管理を
 ると3世紀の中頃に「前方後方形の周溝墓」(法勝寺遺跡)
 世紀代には丘陵頂部に前方後方墳の定納1号墳(日光寺)
 なります。古墳時代後期の6世紀には横山丘陵の南端裾
 貴・塚の越古墳・山津照神社古墳(やまつてりじんじゃ
 貴)が築かれたのち、塚
 (上野)など広範囲に横穴式石室を持つ古墳が築かれます。
 流をしめす副葬品ふくそうひんが出土しています。



筒型銅器出土状況(定納1号墳)

韓式土器(入江内湖遺跡)

長さ12.5センチ、直径2.3~3.0センチの一方
 がふさがった筒状の青銅製製造品です。現在の
 ところ日本で約70点あまり、韓国で68点知られ
 ています。4世紀、倭の国(日本)と伽耶の国
 (韓国南部)の国際交流を知る資料です。



湖北・湖東から北陸・関東へ

定納1号墳 前方後方墳は近江東部・東海から広がっていきました。

畿内から米原へ



石見型埴輪(塚の越古墳)

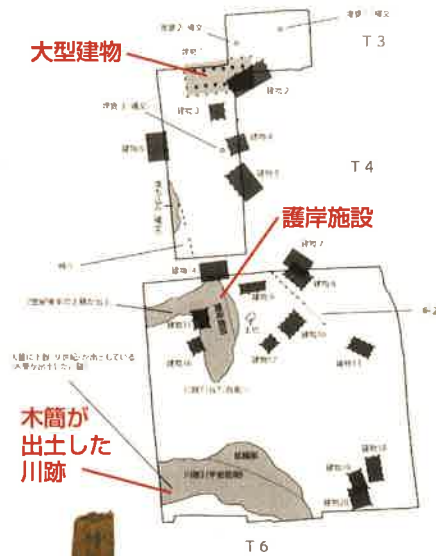
継体天皇即位に関連する遺物です。

古代物流ターミナル「六反田遺跡」

—東山道と琵琶湖を結ぶ拠点遺跡の発掘—



荷札木簡(表)「税代黒米五斗」・右「廿五日」(裏)



六反田遺跡遺構配置図



米原から都へ
米原から東国へ



ろくたんだ
六反田遺跡(彦根市宮田町)は、もともと米原市と同じ坂田郡に属していました。遺跡は入江内湖に流入していた矢倉川の扇状地にあり、矢倉川と入江内湖を通じて琵琶湖とつながっていた河湊とよぶべき施設が見つかりました。陸路の東山道が最も琵琶湖に近くなる場所で、ここから東へ折れて霊仙山麓を東国に向かいます。調査では白鳳時代から平安時代後期までの建物群や護岸施設。荷札や硯、墨書土器など公的な遺物が出土しています。「陸路・東山道と湖上路・琵琶湖の結節点」として、人や物流のターミナル的な性格だったようです。

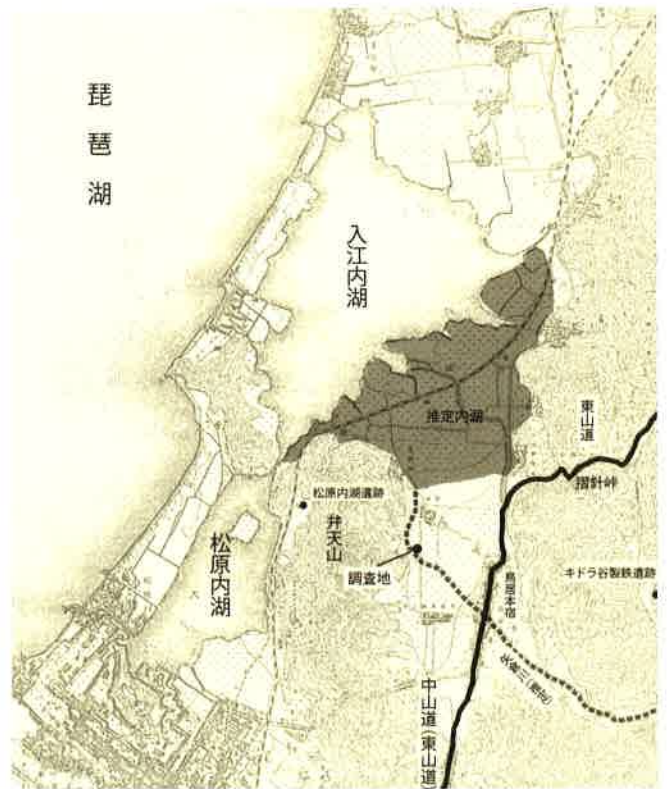
※写真・図は滋賀県教育委員会提供



木簡が出土した流路



掘立柱建物跡



六反田遺跡位置図

中世の焼き物流通 — 在地権力の威信財と日常雑器 —

使い道で
産地が違うぞ



唐物（中国や朝鮮陶磁器）



越前焼



瀬戸美濃焼



丹波焼



国史跡 京極氏遺跡



常滑焼



奈良火鉢

鎌刃城跡

長尾寺跡



備前焼



信楽焼



渥美焼

さいごに — 「米原らしさ」を遺跡から探ろう—

信仰とともに米原に住み着いた北陸や東海の縄文人。県下でもいち早く稲作を導入した弥生人。湖岸・平野部・山麓・山間部とさまざまな地域が集めた米原の地は、いつの時代も住みやすかった場所。各地域を結びつける求心力をもつ地域。それが「米原」なのです。



丸木舟（縄文時代前期／入江内湖遺跡）



【協力者・協力機関（敬称略）】

高橋健太郎・瀬口眞司・堀 真人・高岡 徹・高瀬神社
滋賀県教育委員会・滋賀県埋蔵文化財センター・滋賀県立安土城考古博物館・県立琵琶湖文化館
富山県埋蔵文化財センター・岐阜県文化財保護センター・南砺市教育委員会

東西文化の交差点 —文化は米原を通った！— 2012.3

米原市教育委員会 〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1 TEL0749-55-8020 FAX0749-55-4556